柳田國男自筆
原本 遠野物語

原本遠野物語
編集委員会＝編

世紀の聞き書きの物語
その生成過程がいま蘇る！

聞き書きの稀有なる実践、『遠野物語』。その生成過程を一一〇年余を経ていまに蘇らせる貴重資料を初公刊。柳田国男の息遣いを鮮やかに遺す毛筆草稿、出版の企図に満ちたペン字原稿、修正が記された初校の影印を、三五〇部限定の自費出版であった初版本の版面とともに収録。
はじめに＝赤坂憲雄、解説＝小田富英、三浦佑之。

2022年1月19日発売
A4上製函入　224頁
定価＝本体5,000円＋税
ISBN978-4-00-061512-9 C0095

〒101-8002 千代田区一橋 2-5-5
TEL 03-5210-4000（代表）
website https://www.iwanami.co.jp/
岩波書店

『遠野物語』原本（冒頭部分）

▲毛筆草稿

▲ペン字原稿

▲初校

『遠野物語』は日本民俗学の発祥の記念碑である、といった言い方がしばしばなされてきた。ところが、大きな声で語られることは少ないにせよ、民俗学者の多くは『遠野物語』にたいして冷ややかであり、そもそも触れることすらいたって少ない。むしろ、民俗学にとっては鬼っ子のような存在だと聞いたことがある。同じく明治四〇年代の著作として、『遠野物語』と並び称されることの多い『後狩詞記』のほうが、正統的な民俗学のテクストとして尊重されているようだ（三浦佑之「毛筆草稿『遠野物語』ほか」本書所収）。おそらく、『遠野物語』は文学作品としては高く評価されるにせよ、『後狩詞記』のような一次資料としての価値は認められない、ということらしい。それが民俗学者たちのひそかな本音なのである。あえて書きつけておけば、『後狩詞記』に文学を感受することはむずかしい。……

『原本 遠野物語』を前にして、わたしはひそかに夢想を膨らませる。草稿の群れをくぐり抜けながら、『遠野物語』はいま、ためらうことなく文学作品としての評価や研究に開かれていけばいい。民俗学のくびきは解かれるべきだ。おそらくそれは、日本の近代が産み落とした最高の文学作品のひとつとして、しかも宮沢賢治や宮本常一、石牟礼道子へと連なる耳の文学の系譜において読まれてゆくことになるはずだ。『原本 遠野物語』によって、語りから文字テクストへの階梯をたどるための手がかりが、詳細なる資料目録とともに、いま、われわれに託された。それはたとえば、聞き書きという作法と実践をめぐるはじまりの現場から送られてきた、稀有なるドキュメントではなかったか。その意味では、文化人類学や社会学、心理学などの隣接領域にも手渡されるべきテクストであるはずだ。

柳田国男その人から、一一〇年あまりの歳月を越えて、だれもが「外国に在る人々」となった現代へと、愛らしい無償の贈り物が届けられた。たくさんの、いまを生きる読者のもとへ。

赤坂憲雄「はじめに」より

目次

はじめに　（赤坂憲雄）

一　柳田國男自筆『遠野物語』毛筆草稿

二　柳田國男自筆『遠野物語』ペン字原稿・初校

三　初版本『遠野物語』

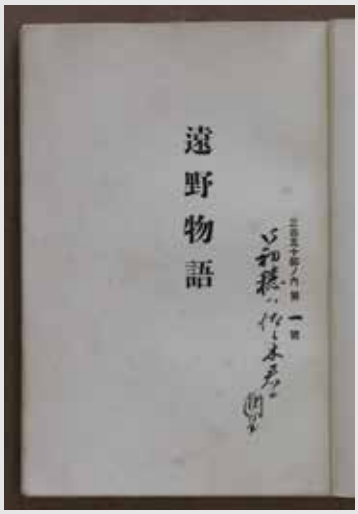
解　説

『原本 遠野物語』公刊までの軌跡　（小田富英）

毛筆草稿『遠野物語』ほか　（三浦佑之）

『原本 遠野物語』関連資料目録

◇カラー口絵４頁　本文一部２色刷



▲『遠野物語』初版本第１号（扉）
（明治 43 年（1910）６月 14 日刊行）
「御初穂ハ佐々木君ニ　國男」という献辞が書かれている

【表面写真】『遠野物語』原稿（柳田国男自筆）
毛筆で書かれた「草稿」２冊、原稿用紙にペンで書かれた「原稿」１冊、朱筆で校正が書き込まれた「初校」１冊。
長年にわたり池上隆祐（長野県松本市）が保管してきたが、平成３年（1991）、遠野市に寄贈された。